Column

エネルギーの源⑭

「環境」vs「状況」、そして「できる状況づくり」とは？

千葉大学大学院工学研究科都市環境システムコース准教授
一般社団法人 洸楓座 代表理事
佐藤 建吉

「環境」は、すでに前世紀から、その重要性が叫ばれてきたキーワードであり、現在、差し迫って対応しなければならないまさに喫緊の課題である。ここで「課題」とは、本コラム⑧（本紙25号）に述べたように、「工」の字が意味する現状と理想のギャップをなくして、解決すべき対象をいう。

課題解決には、その対象の明確化、現状の把握、目的と目標の設定、動機づけやそれを行う方法・人材・時間、そして資金が重要となる。以上は、一般的なプロジェクトマネジメント手法ではあるが、「ヒト・モノ・コト・カネ」などの合言葉が使われている。地方創生の課題においても、「まち・ひと・しごと」がキャッチフレーズとなっている。

これらにおいて、やはり重要な要素は「人材・人財、ヒト」である。「環境問題」の解決にも「ヒト」なくして解決することはできない。ところが、よく考えると「環境」という言葉には、「ヒト」が介在していないことに気付く。「環境」とは、ある主体（者）の周囲（周り）を指す言葉であり、主体（者）である「ヒト」を含んではいない。

そこで、「主体」として「ヒト」を加えた言葉を探し求めると「状況」という言葉が見つかる。「状況」は「情況」とも書くが、ここでは「状況」を用いる。一般に、「状況」は、時間的な変化に配慮して用いられている。「…は、日々変化する状況にある」などである。

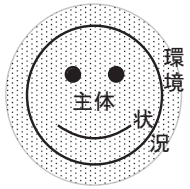
「状況」は「環境」と近い言葉であるが、「主体（者）」を含めるかどうかで二つには大きな違いがある。これを、シンボル的に描いたのが左図である。ヒトマークを主体とすると、「環境」はヒトマークの周囲を指し、集合論で言えば、主体の補集合が環境に相当することになる。一方、「状況」は、周囲の環境に主体（者）をかぶせて考えることができる。

環境問題は、実は人間がつくり出したものであり、その解決は人間、つまり「ヒト＝主体（者）」が関わらずして解決されることはない。したがって、環境問題は、その解決をすべきギャップを指しており、「人間＝ヒト＝主体者」自身の問題である。

「できる状況づくり」という言葉がある。これは、特別支援教育の分野で掲げられている教育指導指針である。この背景には、対象生徒の困難を排除し継続的に作業過程を処理できるように環境整備することが基本となっている。しかし、「できる環境づくり」ではなく、「できる状況づくり」としているところに、妙味がある。教育は環境整備では済まされない。主体者である生徒自身の成長が求められる。そのために考慮した言葉が、「できる状況づくり」であり、単に「できる環境づくり」ではない。繰り返しになるが、状況は主体を含む環境である。この例では、主体者自身の成長を促し、その周囲の環境を整えることこそが、「できる状況づくり」であるといえる。

この「できる状況づくり」という言葉は、変化する状況への対応策でもある。過去から現在までの歴史では、変革、改革、あるいは革命が繰り返されてきた。いま、私たちの前に忍び寄る課題、変化する状況は、地球温暖化であり、それに対する転換や変革が求められている。地球温暖化への対応としては、エネルギー利用の転換や変革も求められている。それには、単なる「環境」としての対応ではなく、前述した「状況」としての対応が必要である。さらに、いま私が、ここで提唱したいのは、主体者自らが関わった「できる状況づくり」の実践と伝播である。

【環境は主体の周囲にあり、主体とは相補関係にある】



【状況は、主体とその周囲（環境）を含んでいる】